

JRA競走馬総合研究所スタッフが語る

サラブレッド の おはなし

藤井良和

(JRA競走馬総合研究所) = 文
text by Yoshikazu Fujii

新たなヒーローが生まれた春のG1戦線も終わり、いよいよ夏のローカル競馬に突入です。夏といえは、やっぱりスイミングでしよう。しかし、馬はというと、季節感がなくてオールシーズン、東西トレセンの馬用プールで、水泳トレーニング(俗にプール調教が行われています)。

馬が泳ぐことは昔から知られており、西部劇などでは馬が川を渡るシーンがよく登場します。元来、馬は泳ぎの巧い動物と言えます。私たちがかつて測定した馬の比重は0.95で水よりも軽く、また水の浮力もあるため、大型馬でも計算上は沈むことはありません。ところが、美浦のプール開場当初、2頭の馬が溺れてしまいました。これは馴致が不十分であったようで、新寄ストレスに弱い馬はパニック状態となり、全身が硬直して動かなくなつたとのことでした。

その教訓を生かし、馬が身動きできない幅の狭い水なしのプールで、徐々に水を入れて慣らしていく馴致が重要視され、その後の事故はありません。さらに副産物として、最近ではゲート入りの悪い馬や気性に難のある馬の矯正に、この場所、この馴致が活用されているそうです。(タンズインザムードなど)。

競走馬の水泳トレーニングの歴史は浅く、50数年前にアメリカで初めて馬用のプールが

トレセンのプール調教はリラックス目的で大盛況

造られ、日本では30年前に常磐支所(馬の温泉)で、20年前に栗東で、その3年後に美浦でそれぞれ開設されました。トレセンでの利用状況は、閑古鳥が鳴いていた時期もありましたが、現在は押すな押すなの大盛況で、年間のべ2万頭近くの競走馬がプール調教を行っています。週(6日間)に直すと350頭前後となり、特に木曜・金曜日は100頭を超えています。

追いついた次の日の調教メニューに、プール調教を組み入れている厩舎が多く、その目的は気分転換、ストレス解消、調教メニューの変化など、要するに馬をリラックスさせるために泳がせています。そのため、長く、あるいは速く泳がせる馬はほとんど見られず、馬なり(馬まかせ)のゆっくりした速度です。運動量的には栗東では円形プール1〜2周が直線の長い美浦では直線プール(約50m)2本が主体です。

泳いでいる時の心拍数は古馬では1分間に150〜160回程度で、陸上でのゆったりしたキャンターのハッキングレベルの心拍数上昇です。運動科学的にも心肺機能や筋力向上を目指したものではありません。リラックス効果を狙った馬体調整と言えます。私たちの希望としては、奇跡の復活を待たずサクラスタオーのように常態、もっと速くそして長く泳がせて欲しいものです。



近年、多くの厩舎が取り入れている「プール調教」